

# 一九八三年 秋 鶴を想う

札 木 照 一 朗



阿寒郡鶴居村 写真提供 萩 千賀

街にナナカマドの赫が、そして湿原に銀穂輝く頃は、白く成りかけた阿寒の嶺々は蒼空の下、手がとどきそう。急拠、鶴についての稿をとのことで、思い出づるまま書き留めてみる。

去る十月六日、道立保養施設として「つるいグリーンパーク」が鶴居村に新設さ

れ、その敷地内に「村立丹頂展示センター」が村民の多年の念願が叶って開所した。丹頂以外の鶴の写真をとのことで、一昨年釧路で初めて開催された「鶴写真展」に使用したものの中から約二〇枚使用して貰うことにした。これは主として国際ツル財団理事長、アーチボルト博士御夫妻の撮影に成るスライドをお借りして作製したもので、額に入れたまま保存しておいたものである。カナダツル・アメリカシロツル・カムリツル・オオツル・ゴシシユウツル等々である。展示場の面積の為か、同センターではこれをさらに複写して縮小して並べてある。

写真と言えば、十月三日、華々しく開催されたニューヨークのアジア協会美術館での「丹頂の写真展」がある。釧路・帯広在住の国際ツル財団の会員一七名の三五点の作品で開催に当ってはアーチボルト博士の記念講演「国際ツル財団と釧路」と、それに続いて祝賀晩餐会が行われた。この写真展については、ニューヨークから電話やお便りをい

ただいて嬉しい限りである。彼の地のソロブチミストの会長やその友人で旅行中の英国人、発育不全研究所の医学者等々の方々の日本への理解の緒になってくれたようである。この写真展は引き続き十月六日まで継続開催され、その後シカゴの科学アカデミーに会場が移され、以後米国内各地を移動し、米年六月には国際ツル財団の本拠であるウイスコンシン州のバラブーで最後の催しが行われ、終了後、作品は同財団に寄贈される予定である。すでに同財団には、釧路在住の会員からスライド等多数の資料が寄せられ、同財団での研究、同財団を訪れて研究に従事する研究者の資料として利用されている。

一九八一年に最後の材料として撮影された釧路地方の自然、人文の丹頂に関係ある事項を、その全体の四分の一とする、映画「フライト・ツウ・サバイバル」は米国内で立派に認められた国際ツル財団の事業を描いたものである。これはウイスコンシン州から始まり、全米各州の視聴者に大いに歓迎されている。今年で満一〇周年を迎えた同財団の鳥類学的な調査研究と技術の向上、さらに国際的な活動とその成果、殊にソ連との民間外交の一助としての役割もよく語られている。鶴の中で最も研究のゆき届いているカナダツルに例を求めてツルの一生が理解できるのも楽しい。私はこれを一本、鶴の映画の蒐集に加えた。日本野鳥の会釧路支部総会でも使用していただいた。さらにご利用いただければと考えている。釧路地方の部分の撮影に当っては、CBCの職員はじめ、アーチボルト博士御夫妻、「米国の画家」で動物画家の髯髯たるグラミー御夫妻を中心に地元の財団会員等の大きな支援がなされた。その最終日には、道東湿原群の各町村長や教

育委員会や関係者が阿寒の休養センターに集い、深更まで意見の交換に時を忘れた。この和やかな語りがあったこそ、この映画の中に釧路の人々の生き方、美しい自然、その中に生きる丹頂の優雅さとが画き出されたものであろう。殊に阿寒町での鶴の慰霊祭の情景は、米国の人々の心に残るものようである。

映画についての最近の面白いことの一つに、オーストラリアのクイーンズランド州政府が製作中の「メッセンジャー・オブ・ザ・ゴッツ」がある。一二年前、彼の国の自然保護団体に呼ばれて娘と二人で各地で話をしたり、鶴の生息地を訪れたり、博物館に入り浸ったりしてパースから出て来たことがある。その折に購入した映画「プロルガ（ゴースニーツル）」では、あの大陸には鶴はそれ一種となっていたが、その後オオゾルの生息が認められ、前出の映画でもこの二種が公認されている。

さて、この映画の主題曲は鶴を素材にしたピアノ協奏曲で、すでにメルボルン交響楽団で録音済みである。作曲者で協演者はシドニーのスカルソープ氏である。メルボルン音楽院、オックスフォード大学、エール大学に学び、サセックス大学の客員教授である。世界を広く訪れ民族音楽にも長じ、一九六八年の「日本と西欧の芸術についての国際円卓会議」にも参画している。この協奏曲は八七六年、陽成天皇の即位の大典に演奏された古い日本の曲を素材としている。一方、制作に当るテラー氏は一九七三年以来「オーストラリアの自然」の続き物で知られる。著者BBCやABCで名を成した人物であり、穏やかな語り口の中に高い学識と広い好奇心を感じさせる人である。米年早々、最後の撮り残しの丹頂を取めに来日の予定である。この作品はウォーキンショウ博士の名著「クレイン・オブ・ザ・ワールド」にも比すべきものとなることが楽しみだ。

九月二十七日、東京・渋谷のシャンピアホテルで、日本野鳥の会の市田・園部氏ら研究小委員会の誘いで、鳥類保護連盟・山階鳥類研究所、日本自然保護協会、日本鳥学会、国際鳥類保護会議、国際ツル財団の諸団体から一三名が出席、丹頂についての会議が行われた。ブリトン女史の丹頂の研究のための寄附、九州の団体による正富博士を団長とする中国におけるツル研究調査団の派遣等のことは、諸外国に大きな遅れをとっている日本のツル研究に、徐々に曙光が見えるようになるかもしれない。当日の会議では、百瀬・中村両氏の現状報告が行われ、吉井・柴田・友田各氏から指導的な意見の開陳があり、丹頂と地理的な隔りのある東京での動きの将来への努力について多くの議論がなされ

れた。

百瀬・中村両氏の報告は、正富博士によって、研究における日本的困難性にもかかわらず十数年前に始められ、その後、国際ツル財団、さらに最近、日本野鳥の会との協同作業になって来た一連の研究のつながりである。丹頂生息数及び営巣状況の変遷・湿原及びその周辺の開発の動きと計画・湿原の各部分の現状が示された。両氏は殊に地元の人々の考えの育成を尊重、保護を論ずる場の設定、開放的な情報交換、標識調査のための準備、渡り鳥レンジャーの必要性、生息数の減少に注意、環境庁移管の際の対応策等の感想と提案を示している。

釧路湿原を中心とする道東湿原群の開発の進展は衆知のごとく、基礎的科学的研究を抜きにして一般の開発技術が行われて来たため、釧路の二の舞にならぬようと天塩川流域で論ぜられて久しい。湿原の概念で見られる以前、たとえば松浦武四郎の釧路川流域調査などの遙かな以前、われわれの見る湿原あるいは海灣の周辺に幾世代にもわたって住んでいた人々の生活に想いを致し、今語られる伝説にはもう尋ねべくも無い頃の鶴と人との関わりを想う。長さの割に硬くて折れ難い鶴の骨も、飛ぶという運命の要求に軽くてきた構造は、それが化石として目に付き易い存在にはなり難い。最近国内各地で多くの遺構や古生物学の層をさらに過去に引き伸ばすような発見が相次いでいるから、この辺りについても新しい知見が得られるようになるかもしれない。

わが国においては残念なことが多いが、技術の分野では無く、それを支える学者の数の寡いのはその一つである。ツル学における貧弱さはいうに及ばず、火山性の噴出物に覆われた生物（人間も含む）についても大きな力が要求されるであらう。最近これに似たことかなと考えさせられる書物に出くわした。オーストラリアのオーストラリア大学に出たブロンク博士の著「ザ・タイム・オブ・グリークネス」である。火山の齋らすものに興味をもつ第四紀学者の彼は、パプアニューギニアの高地に広く伝わる「暗黒の時」——光は失せ、空からは灰が降る——の口伝に心を引かれた。広範囲の調査により約三〇〇年前のとてつも無い大噴火を、なんの記録も見出し得ぬまま、その火口をロングアイランドに求めることができた。近代的調査方法によき助力となったのは、彼が集めた膨大な口伝の聞き取りであった。鳥のことがよくでてくるので、どれかの口伝に鶴が出て来はせぬかと読んでみたが、到頭見付からずに終わった。ブロンク博士が踏み越えた多

くの山なみに境された多くの部族のいう「鳥」の語の中には多くのトリが含まれていたであろう。鶴がいなかったとは限るまい。オオヅルがオーストラリアにもいるのだから、あそこにもおかしくはなさそうに思う。

ヴァージニア州からフロリダ州の北部まで延々と深く内陸部をも含んで広がる大湿原ポコシンズ（アルゴンキンインディアン語で丘の上の湿地）についての多方面からの検討が、ほぼその南北の中間のノースカロライナ州のボーフォートで、一九八〇年一月初旬に開催された。ダーラムのデューク大学の環境学のカーチス・リチャードソン博士によって主宰されたこの集りの紀要の冒頭に、「キャロルやジョン、それからポコシンズの価値を初めて見出した人々、アメリカインディアンに想いを寄せて」との言葉を見るとき、それに続く三百数十頁は地学にしても、生態学にしても、資源学にしても、人間としての科学的世界観に打たれるものがある。

米国においても、いわゆる観念的感情的自然保護論者の語るようなん気なことはか行われてはいない。しかし、その時に使える学問的思考を以て現実を視て、また多くの専門学者をそろえて、まず良く語る、そして事に当るといふことは経済的な点からだけではなく、日本人にはしよせん無理なことなのであろうか。一見これと相反することのようにも見えるが、たとえば最新型の道具を買って来た、学歴のあるお人がどうしてもそれを扱いきれない。そこへ旧式の道具で長年月苦勞して、その道具がなすであろうしつみを会得した学歴の無い人が見にくる。もちろん少しの対面でその人は新型を上手に使いこなす。その人の心の中にはつくづく、話のできる偉い人がいない淋しさを感ずる。

釧路湿原は周辺の開発による中心部の汚染で良く知られている。可能な範囲で水系の人工的な変化など、研究の分野における湿原の保全への努力は周辺の住民にとって望ましい。政治・経済・軍事などは、人間がそれなりの生活を可能ならしむるためのものではないながら、民度の問題もあろうか、また地形的なものも見逃がせないが、何とか考えはじめなければならぬことだろう。

この雑文が世に出る頃は、世界野生動物基金の機関紙がかつて釧路丹頂鶴自然公園におられた高橋良治氏の鶴との素晴らしい生活を載せて現われているだろう。昨年の今頃初めて釧路湿原にいられたエジムバラ公は、「釧路では高橋氏におあいなさるべくとス

コット卿に言われてね」と言っておられた。

こうしているうちに人里めざして丹頂が集まる季節がまたやって来た。網走では白鳥のために危い電線を地中に埋めるといふ。鶴の方も早くそのようになれば良い。この数年、夏でも給餌場に遊ぶ何羽もの鶴がいる。行くところが無いのだろう。冬の混雑、病気が流行ったら全滅だ。パラプーのように増殖ができるように早くならないかなど自分の頭の蠅も追えず考えることしきり。釧路に生まれ育った私には、見渡すところすべて夢のような今昔である。ここに昭和十四年十二月、この地を訪れた内田清之助博士の「旅と鳥」へのものを抄録させていただいて筆を擱きたい。

「ここは四五年前の元旦の朝日新聞に島田謹介氏の素晴らしい丹頂の」写真の出た所である。その場所は釧路市の北方に位する約二万数千町歩の一望広漠たる大湿原で、東は釧路川で境され、北及び西は山で囲まれ、南には阿寒古川が貫流し、区域内には点々湖水が散在している。鶴の保護からいってもこういう所を残すのは是非必要だが、鶴は別としても、日本の様な箱庭的風景の国にこんな日本離れのした大きい所も一ヶ所位あってもよいと思う。色々の鳥・魚も面白いもの変わったものが多い。ハルビンの魚市場に行くと、松花江で捕れた魚が大きなたらいにトグロを巻いて入っており、どの種類も日本のもそれより馬鹿げて大きい。この辺の魚もその傾向がある。帰る時、土地の有志の方達が土産にと汽車のデッキへ投げ込んでくれたのは、殆んどマグロか何かと思われる様な魚である。それがコイなのである。丁度昆虫採集の継竿を持っていたから、それで測ってみると二本分あった。一本が二尺だから驚くなかれ長さ四尺に余るコイである。全く吹き流しのコイみたいだ。ムザムザ口腹の資とするには勿体ないので、北大の犬飼教授がおられるのを幸い、大学の動物学教室に永久に保存して貰うことにした。しかし教室でもこれを丸ごと漬ける標本版には頭を悩ましたことだろう。」

（北海道自然保護協会、釧路自然保護協会々々）